

「普段からつながりを作る」「勇気を持ってお願
いする」「何度でも御礼をする」を大事に

学校法人実践女子学園

【募金事業の概要】

実践女子学園では、「実践女子学園さくら募金」、「教育振興協力資金」、「教職員奨学資金」の3つの募金事業を行っています。このうち、新しい取組みとして2020年度に創設された「実践女子学園さくら募金」の成果が着実に始めていると担当者は話します。

(1) 実践女子学園さくら募金の概要と創設の経緯

「実践女子学園さくら募金」(以下「さくら募金」)は、学生・生徒の充実した学園生活の支援をテーマとしており、寄付者は「①学生・生徒への奨学金」、「②教育支援」、「③課外活動支援」、「④下田歌子先生顕彰事業」、「⑤その他」の5つの使途の中から自分の意向に沿ったものを選択することができます。募金の対象者は、卒業生を中心とした幅広いステークホルダーです。一口の金額は1万円に設定され、金額のハードルとしては低めとなっています。また、寄付金額に応じて、学園オリジナルグッズなどの返礼品を用意しています。



「さくら募金」のページ

でした(なお、在学生の保護者や教職員を対象とする募金は周年事業に関わらず実施されています)。創立120周年を機に、当時の理事長から「周年事業終了後から次の周年事業の間も、切れ目なく幅広く寄付金を募る仕組みの必要性」が示されたこと、また収入の多様化を目指す一環として、「さくら募金」が創設されました。創設当時の担当者は、趣意書等の作成において、募金の目的や寄付の使途について分かりやすく記載することに苦心されたようです。

(2) 教育振興協力資金・教職員奨学資金

「教育振興協力資金」は、学生・生徒支援の推進のため、主に在学生の保護者を対象とした募金であり、一口の金額は10万円に設定されています。

また、「教職員奨学資金」は、家計の急変による経済困窮度が高く学費が払えない学生・生徒のための奨学金の資金であり、主に学園の教職員を対象としています。納付にあたっては一括納付または給与天引きが選択できます。

(3) その他

学園では、上記3つの募金事業の他に、現物寄付や遺贈を受け入れていきます。遺贈については、実際に受け入れた実績のほかにも事前相談を数件受けており、「今後増えていくだろう」と担当者は見込んでいます。

【募金対象者への活動】

現在は卒業生との「つながり」作りを力を入れています。2022年〜26年度の中期計画では「学園の価値・競争力の強化」を目標とし、達成するための方針の一つに「ステークホルダーとの関係性強化」を掲げています。具体的な取組みとして「卒業生と学園(学生生徒)、卒業生間のネットワークの構築」を挙げ、戦略的に進める姿勢を示しています。経営企画部においても目標達成のため、卒業生との「つながり」作りを通じて、卒業生の物心両面からの支援の獲得を目指しています。

① 同窓会組織の支部への訪問活動

卒業生とのネットワーク強化のため、2021年度から同窓会組織「実践校

会」の支部への訪問活動を実施しています。訪問活動を通じて、卒業生に学園の「今」を知ってもらい、学園との「つながり」を感じてもらおうことが目的です。訪問活動に際しては、大規模な支部の総会が行われる場合には理事長や学長が対応し、その他の支部長への訪問は担当理事や部長級職員(学園の卒業生)が対応します。支部は全国に39箇所あり、2年かけて一周する形となっています。

それまで同窓会組織とは疎遠だったこともあり、訪問活動を開始した直後は卒業生側にとまどいが見られたものの、現在では「応援したい」「母校のために力になりたい」という声が聞こえてくるようになりました。それだけでなく卒業生の方からも学園側に対して、卒業生主催のイベント情報の共有や「さくら募金」の返礼品の候補となりそうなお店の紹介を受けるなどといった形で、学園と卒業生の双方方向のコミュニケーションが生まれ始めています。学園としては訪問活動に手ごたえを感じており、今後は支部の下部組織「科会」(学科単位の卒業生の集まり)への訪問も検討しています。多くの卒業生とコミュニケーションを取る機会を今後さらに増やしていく予定です。

② 理事長によるプレゼンテーション

「実践校会」では1年に1度、全支部長を集めた総会が開催されています。従来、学園側からは理事長が出席し換

抄を行うのみでしたが、2022年度は挨拶に加え、理事長による中期計画の内容説明や卒業生ネットワークの構築を強化したい旨のプレゼンテーションを行いました。また、総会後の懇親会では、理事長・学長・校長による学園の現状に関する報告も行われました。

こうした学園のトップによるプレゼンテーションによって、「実践桜会」側も、学園との距離を縮め、これからは仲間として一緒にやっつけようという方向性が変わりつつあります。同窓会組織との距離感について、担当理事は「ある程度の線引きは必要」としつつ、現在の状態を「程よい距離感」と評価しています。

③同窓会組織理事長との懇談

さらに「実践桜会」の理事長と経営企画部において、月に1度定例会を実施しています。学園からは、学園行事の案内、活躍している在学生、メディアの掲載に関する情報などを共有し、「実践桜会」の理事長からは、活動報告や学園に対する意見・要望・助言などがなされています。

このように、「実践桜会」への積極的かつ丁寧な働きかけを行っています。その結果、卒業生からも学園への歩み寄りがみられるなど、着実に「つながり」ができています。いずれの取組みも寄付の獲得に直結するものではありませんが、卒業生と「つながり」続けること

は寄付のチャンスを広げることに繋がります。担当理事は「一番厳しいのは（周年事業など）建物を建てる時だけ寄付をお願いに行くような状態。ステークホルダーとの関係はきちんと温めていきたい」と、普段から関係性を構築することの重要性を強調しています。



2022年版の年賀状

【寄付者への報告・御礼】

(1) 寄付に関する報告

寄付の実績に関する報告は、会報誌「桜むすび」や学園HPで行っています。「桜むすび」では主に「さくら募金」について使途ごとの金額実績を報告し、HPでは「さくら募金」、「教育振興協力資金」、「教職員奨学金資金」の各募金事業の件数と寄付金額を年度ごとに報告しています。さらにHPでは、寄付者の希望により名前(団体名)を掲載しています。その際、金額の多寡は伏せ、名前のみ50音順での掲載となっています。なお、法人内においては、半期に一度常任理事会で寄付金の獲得状況の報告が行われています。

数値としての実績報告の他に、寄付が実際にどのように使われたかを寄付者に対して報告する機会も設けていま

す。例えば奨学金では、奨学金をもらった学生が寄付者への手紙を書き、それを経営企画部が寄付者に届けています。さらに動画を使った報告も行っています。学園では、中学・高校のダンス部の活動が盛んであり、賞を取るほど活発です。そこで奨励金として寄付による奨学金を給付し、その奨学金でダンスの衣装が作られました。実際に作った衣装を着てダンスを踊る動画を作成し、高額寄付者の名誉称号贈呈式やホームカミングデーにおいて放映したところ寄付者から非常に喜ばれました。

(2) 寄付者への御礼

①さくら募金の返礼品

「さくら募金」では、寄付者へのお礼の気持ちとして返礼品を導入しています。一定の金額ごとに数種類の返礼品を用意しており、寄付者は金額に応じて希望の返礼品を選択することができます。返礼品には、学園のオリジナルグッズのほか、卒業生が営むお店の品物や創設者の出身地の地酒など学園とゆかりのあるものを用意しています。

オリジナルグッズについては、卒業生にアンケートを取ってニーズを把握したうえで製作しています。製作においては、一筆箋やハンカチのデザインを学生・生徒が手掛けるなど、学生・生徒からも協力を得ています。学生・生徒と一緒に作り上げたグッズは、寄付者から人気が高くなっています。

また、協力を依頼するお店については、日ごろからお世話になっている卒業生や企業にアプローチをして決定しています。

返礼品の金額的な還元率は約2〜4%であり、一般的なるさと納税の返礼品と比べると高くはありません。「ものを買いたいわけではない」という寄付者の声を受け、そうした「寄付をしたい気持ち」に沿って返礼品を選定したところ、今の還元率になりました。

②高額寄付者への名誉称号贈呈式

寄付金額が累計100万円以上となる個人の高額寄付者に名誉称号を贈呈しています。名誉称号は5種類あり、金額の基準は100万円以上から5千万円以上まで5段階に設定されています。高額寄付者は年間数名おり、年に1度、該当者を学園に招いて名誉称号の贈呈式を開催しています。